

# 命令文の統語論的研究

三 石 直 人\*

## A Syntactic Study of Imperative Sentences

MITSUISHI Naoto\*

### Abstract

The purpose of this study is to clarify from the viewpoint of school grammar, why a base form of verbs is used in imperative sentences, and why an imperative subject, *you*, is omitted. Compared with present subjunctive mood, it became clear that the form does not express present or past; therefore it expresses an action which has not yet been started or completed and the speaker does not know whether the listener will do it or not. And the reason why an imperative subject is omitted is that it is obvious that the subject is *you*. As a result of investigating imperative sentences gathered from corpora on the web, it was shown that when a subject, *you*, appears in imperative sentences, it expresses the speaker's irritation, desirable request, and so on. In addition, it is used when the speaker distinguishes the listener from the others.

キーワード：命令文，学校英文法，原形動詞，主語，人称代名詞 *you*

Keywords：imperative sentences, school grammar, base form, subjects, a personal pronoun *you*

### 1. はじめに

文は通常、主語と動詞を含んでいるものであるが、*What a pity!* や *Ouch!* のような文も存在するため、「文」というものを統語上の観点から端的に定義し、分類するのは困難かもしれないが、意味的にはそうとも言い切れない。多くの文法研究者は、文を平叙文、疑問文、命令文、感嘆文の4種類に分け、それぞれ定義づけている。これらの中でも、とりわけ命令文は独特な文の構造を持っている。命令文の主な統語的特徴は、下記の2つである。

(a) 動詞には原形動詞が使用され、-ing 形や過去形などが使用されることはなく、また、*will* や *can* のような法助動詞も使用されることはない。

(b) 主語は通常、省略される。

(a) と (b) が命令文の最も基本的な文構造と言えるが、このような文は他にはない。通常、助動詞がある場合を除き、文中の動詞に原形が使用されていれば、時制が明示されていないことになり、時制が明示されていなければ、文としては容認されない。主語が文から削除されれば、動作主が曖昧になるため、*informal* な会話などでない限り、文法的な文ではなくなってしまう。しかし、命令文は (a) と (b)

\* 工学部英語系列非常勤講師 Part-time Lecturer, Department of English Language, School of Engineering

の定義からもわかるように、時制も主語も文中に表されていないにもかかわらず、容認されてしまう。

このように、命令文は非常に不可思議な文構造を持っているにもかかわらず、命令文研究の関心事は、ほとんどその基本構造には向いておらず、統語的側面の研究であれば、基本構造から逸脱した箇所を取り扱い、意味であれば、語用論的側面を扱うことが主である。さらに、命令文の基本構造について考察した文献でも生成文法的側面からの研究であり、学校文法の観点から考察したものは数少ない。よって、本稿では、命令文の基本構造を学校文法の視点から研究することを試みる。なお、本稿は2013年に筆者の書いた修士論文を一部抜粋し、加筆、修正をしたものである。

## 2. 原形動詞を使用する理由

本節では、1節の定義(a)で示した原形動詞に関して考察していく。なぜ命令文の動詞に原形が使用されるのかを考えるために、まずは動詞の原形とはどのような意味なのかを見ていく。

(1a) **Open** the door.

(1b) \***Opens** the door. [現在時制]

(1c) \***Opened** the door. [過去時制]

(1a) は命令文として容認されるが、(1b) と (1c) のように現在時制を表す-s や過去時制を表す-ed が動詞に付与されていれば、命令文として容認されないことを示しているのであるが、原形動詞は何を意味しているのか。(1b) と (1c) のように、動詞に時制が示されていないということは、(1a) の話し手も、それを発話された聞き手も、「扉を開ける」という動作が行われるか否かがわからないのではないだろうか。たとえば、*He opens the door.* のように、現在時制を表す-s が付いた動詞であれば、現在の習慣的な行動や一般的真理などを表しており、動作が実際に行われることが含意される。*He opened the door.* であれば、過去を表す-ed が付いた動詞であるため、実際に過去において行われた動作を表す。しかし、これらのように時制が明確ではない原形動詞は実際に行われることも示していなければ、過去

において行われたということも示していない。したがって、原形動詞は未然の動作や状態を表すと言うことができる。では、実際にこの「未然」という意味は原形動詞に含まれているのだろうか。

この疑問は命令文だけで考えていても解決できないので、他の文と比較することで明らかにしていく。原形動詞が本動詞として使用された文は助動詞が使用された文を除いて命令文しかないので、従属節内で使用された動詞で考えてみる。下記の4例の中で使用された従属節内の動詞がすべて原形動詞であることを確認していただきたい。これらはすべて仮定法現在である。

(2) If a man **walk** in the woods for love of them half of each day, he is in danger of being regarded as a loafer. (Threau, *Life without Principle*)

(3) Come quickly, ere he **die**. (COHA)

(4) The people may need to be instructed, lest they **be led astray**. (COHA)

(5) Old Jesse demanded that he **be given** charge of the boy. (Anderson, *Winesburg, Ohio*)

(2) は if によって導かれる条件節である。(3) は ere が使用されており、これは before と同義の接続詞である。Before が時を表す副詞節を導くことができるように、ere もまた同様の副詞節を導くことができる。(2) と (3) は原形動詞が使用されているが、if 節も ere 節も未然の行為を表す。If 節は条件を表し、「walk という動作が行われれば」という意味である。行われることもあるし、行われなくてもあるのが条件である。Ere 節は「die という動作が行われる前に」という意味であり、まだ die という動作は行われていない。これははっきりと未然の行為を表していることがわかるはずである。(4) の lest 節は「……しないように」という意味で、事前の危機回避を表す。事前の危機回避ということは、まだ、「be led astray という状態にはなっておらず、そうならないように」と述べている。つまり、これも (2) と (3) と同様に未然性を意味していると言ってよい。(5) は that により導かれる名詞節で、demand という動詞の目的語になっている。Demand を含め、suggest (提案する), require (要求する), order (命令す

る) などのように、人に対してある動作や状態を促すことを意味する動詞に続く **that** 節内では仮定法現在が使用されることがある。動作を促すことができるのは、実際にその動作がなされていないからである。そのため、(5) も未然の行為を表すと言うことができる。

以上のことから、原形動詞には未然性が含まれており、命令文にも同じ意味が含まれている。仮定法現在と同じ論理で言えば、命令とは実際に、ある動作が行われていないため、行うように促すための文であることから、この考え方が正しいことが証明できる。

### 3. 命令文の主語

本節では、1 節に挙げた定義 (b) に対する疑問を解決することを試みる。命令文では通常、主語が示されることはない。感覚的に主語が何かは予測できるが、平叙文や疑問文などと比較すると、主語を示しても問題とは考えにくく、あえて省略する理由はない。また、主語を示す命令文も存在するが、命令文に主語が付与されることでどのような効果があるのだろうか。そして、主語が付与されるということは命令の対象が明確になるということであるが、呼びかけ語のある命令文でも同様の効果が得られる。それでは命令文の主語と呼びかけ語を明確に線引きして区別する必要があるのか。このような疑問をひとつずつ紐解いていく。

まず、命令文の主語が示されない理由を考察していく。命令文を除いて、文には主語が明示される。それは主語がなければ、動作主が曖昧となり、文として容認されなくなるからである。主語がない文が容認されないのならば、主語のない命令文がどうして容認されるのか。はじめに、命令文の主語にふさわしい語を検討してみる。たとえば、先に挙げた (1a) を例にとって考えてみる。(1a) は命令文であるため、話し手の目の前にいる人に対して使用されているのは明らかである。それ故、(1a) の主語になり得る語は **you** であると考えられる。

(1a') **(You)** open the door.

これは 2 つの統語的特徴からも正しいことが証明される。

(6a) **He seated himself.**

(6b) **Seat yourself (/yourselves).**

(6c) \***Seat myself / himself / herself / itself / ourselves / themselves.**

(7a) **He gave me a hand, didn't he?**

(7b) **Give me a hand, will you?**

(7c) \***Give me a hand, will I / he / she / it / we / they?**

(6a) から (6c) は再帰代名詞の再帰用法の例である。これは主語と目的語が同一の人や物の時に使用される。命令文中で使用される再帰代名詞は **yourself** か **yourselves** のみで、それ以外の再帰代名詞は認められない。ここから、主語にあたる語が **you** であると考えられる。また、(7a) から (7c) のような付加疑問文からも同じことが言える。付加疑問文の主語も、その直前の文の主語と同一の人や物でなければならないため、命令文の主語も **you** であると考えざるを得ない。以上、再帰代名詞と付加疑問文の規則により、命令文の主語が **you** であるということが証明される。

以上のように、命令文の深層構造にある主語が **you** であるという結論に至ったが、裏を返せば、数の単複に関係なく、1 人称と 3 人称が主語になり得ないということである。それは常に命令の対象が目の前にいる聞き手であり、そうでない者には命令することができないからである。すなわち、命令文の主語は 2 人称に制限されるため、主語を明示しなくても、話し手、聞き手の両者の間で命令を受ける相手が了解されているのである。それ故、命令文の主語は省略されるのだと考えられる。

命令文の主語が省略されるのは、主語が **you** であるということが明白であるからという理由であるとするならば、主語を明示しても非文にはならないということである。たとえば、(1a) に主語である **you** を明示させ、**You open the door.** としても問題ではない。つまり、命令文の主語の省略は義務ではなく、任意であり、その反対に主語を明示することもまた任意である。では、(1a) の 'Open the door.' と 'You open the door.' は意味上、どのように異なるの

だろうか。

通常、主語が省略される命令文において、主語があるというのは幾分、奇妙に感じられる。気分次第で主語を付与したり、しなかったりするのでは統制がとれない。不要な主語をあえて明示しているのだから、それは主語を明示すべき正当な理由があるはずである。最も考えられる理由は、動作主が不明瞭な状況で主語として *you* を明示し、誰に動作を促しているかを明確にする場合である。たとえば、オフィスや教室など多くの人がある場で火災が起き、扉の近くにいる人物に対して「君は扉を開けなさい」と日本語でも言えるように、「*You open the door.*」とは言えないだろうか。もしくは、動作主が *you* であることを明示するということは、その動作主を強調しているとも考えられる。「扉を開けなさい」と言われているのに、なかなかやらなかった者に対して「君が扉を開けるんだよ」のように言うとき、「*You open the door.*」と言えそうである。すなわち、命令文を発した者が苛立ちを覚えて主語を付けることもあり得るということである。このような事が仮説として挙げられるが、実際にどうなのだろうか。主語の *you* が明示された例を見ていくことにする。

(8) *Yussuf turned on her in a fury. 'You be quiet, woman!' he shouted.* (BNC)

(9) '*Don't you be using words like that in front of them children,*' she instructed him *fiercely.* (BNC)

まずは、(8) と (9) の引用符の中を見ていただきたい。どちらも主語のある命令文である。動詞が現在形の *are* ではなく、*be* となっていることから命令文であることがわかる。その直前に *you* があり、これが命令文の主語である。引用符の外側にある地の文から、これらの命令文が怒りによって発せられたことが明らかになる。(8) では、引用符の直前に *Yussuf turned on her in a fury.* とあり、意味は「ユスフは激怒して彼女に食ってかかった」である。Turn on も *fury* も怒りや苛立ちを表す表現であり、ユスフが食ってかかって発した言葉が *You be quiet, woman!* である。「おい、おまえは黙っている！」くらいの意味になる。この台詞の中にある *woman* という呼びかけ語もジーニアス (2001) は、苛立ちや怒りを表

すものと記載している。したがって、この命令文がかなり強い感情から発せられていることが証明される。(9) では、引用符の直後にある地の文に、*she instructed him fiercely.* とあり、*instruct* の内容は引用符の中身である。そして、*instructed* を修飾する *fiercely* は *fierce* の副詞形である。*Fierce* は、COD<sup>6</sup> に '*violent in hostility, angrily combative*' とあるように、怒りや敵意をむき出しにした激しい感情を表す語である。すなわち、この引用符の中にある命令文も、(8) と同様に苛立ちを表しており、「子どもたちの前でそんな言葉を使わないでちょうだい」となる。

では、次の例はどうだろうか。やや長めの引用となるが、文脈に注意して見ていただきたい。

(10) *I was waiting in front of my house for the school bus with my mom. "You be a good boy, A.J.," my mom told me. "I will." "Don't get into any trouble, A.J.," my mom told me. "I won't." "Remember to raise your hand when you want to talk, A.J.," my mom told me. "Don't shoot straw wrappers at the girls, A.J.," my mom told me.* (COCA)

(10) は母親とその子どもの会話である。最初の引用符の中にある *You be a good boy* は「良い子にしていなさいね」という意味の命令文である。命令文の主語として *you* が示されているが、これは苛立ちのような強い感情を表しているだろうか。前後の文脈を読んでみると、苛立ちのような激しい感情を露わにしているような言葉や表現は書かれていない。しかし、母親の台詞を見てみると、すべて命令文になっており、「面倒を起こさないようにね」、「話したければ手を挙げることを忘れてはいけません」、「女の子に向かってストローの袋をとばしちゃダメよ」のように、子どもに対して学校での注意事項を述べている場面であるとわかる。このようなことを母親が言うということは、この子どもが普段から周りに迷惑をかけるような子どもであることが推測される。したがって、最初の *You be a good boy* は「ちゃんと良い子にしているのよ」とか、「お願いだから、良い子にしていなさいね」のように、*be a good boy* を強調していると言える。呼び名を付けるとしたら、

「請願の you」という感じだろうか。この you と同様の意味を持つ語が強調の助動詞の do であるが、安藤 (2005:881) は、強調の do と命令文の主語の you とが共起することは容認されないとしている。

(11) \* **Do you** come here. (安藤 (2005:881))

これは同一の意味を持つ語が並んだため、冗漫な印象を受けるためであると思われる。

(12) も、(8) から (10) と同様、主語を顕在化させた命令文である。

(12) **You** be the leader in front and I'll be the leader behind. (BNC)

これは苛立ちでも、請願でもなく、対照の you である。And の前後で you と I がそれぞれ、前方と後方でリーダーをするように述べた文である。このように、(12) はそれぞれの役割を述べているため、you 自体を強調しており、It is you who must be the leader in front. のような意味になる。(13) と (14) の you も、対照の you であるが、please と共起している。Please は命令文から感じられる語気の強さやぶっきらぼうな印象を和らげ、その語が使用されると、いくぶん丁寧な命令となる。

(13) Please, **all of you** be seated. (BNC)

(14) Please **you** wait over there. (BNC)

このような文は、村田 (1984:35) では非文であるとされている。たしかに、you が命令文に明示されることで、苛立ちのような強い感情を表すことがあるため、その時は please と you との共起はないと考えてもよいだろう。しかし、(13) と (14) から、you が現れることによって、必ずしも苛立ちのような負の意味になるとは限らず、むしろ、丁寧な命令になることもあり得るという好例である。

これまで you が命令文の主語として使用される例を見てきたが、次の例は 3 人称の名詞や代名詞を主語として使用した命令文である。

(15) **Everybody** be quiet, please. (COCA)

(16) **Joyce** hold one end of the rope and **Rene** hold the other. (Davies (1986:134))

(15) と (16) で使用された動詞を確認するとそれぞれ be と hold であり、平叙文であれば、be は is か was、hold は holds か held になる。そうならないということは、原形動詞と判断せざるを得ず、これらもまた、命令文であるとわかる。Everybody と、Joyce と Rene はそれぞれ、命令文の主語となっている。このように、命令文の主語に 3 人称の名詞や代名詞が使用されることもあるが、それは統語的な問題であり、意味の観点から見れば 2 人称主語と断定してもよい。なぜなら、命令文の表す意味の本質は、ある動作を聞き手に表すもので、現場にいない者に対しては命令できないからである。したがって、(15) と (16) は見た目こそ、3 人称主語と言えるのかもしれないが、意味の上では 2 人称主語であると言える。Everyone や Joyce と Rene が 2 人称主語であって 3 人称主語でないのは、これらを人称代名詞の he や she に言い換えることができないことから明らかである。また、everybody も Joyce と Rene も 2 人称主語であるならば、呼びかけ語と変わらず、(15) と (16) を、以下のように comma を直後に付けて言い換えることができる。なお、表面上の 3 人称主語と呼びかけ語の違いは音調だけで、意味には変わりはない。

(15') **Everybody**, be quiet, please.

(16') **Joyce**, hold one end of the rope and **Rene**, hold the other.

#### 4. おわりに

本研究では、命令文の基本構造を学校文法の視点から考察してきた。基本構造を考えていくことで、「命令文」という文をより深く理解できたと感じている。この基本構造は命令文の本質を反映しており、命令文の意味を考える上で必要不可欠である。本研究によって命令文の意味を研究するための土台が築けたため、今後はこれを基に、命令文の意味論的研究や語用論的研究に着手していくつもりである。命令文とはその名の通り、「命令」を意味し、人に対して動作を促す文であるが、そこから派生した用

法がどれほど存在するのかを研究していきたい。

最後に、ここまで記述してきたことを簡条書きにし、本稿の結びとする。

- 命令文の動詞に原形が使用されているのは、未然性が含意されているからである。
- 命令文の主語が省略されるのは、深層構造にある主語が *you* であるということが話し手と聞き手の間で自明であるからで、主語を明示したとしても非文にはならない。
- 主語の *you* を明示させると、「苛立ち」、「請願」、「対照」を表す。「苛立ち」のような負の意味でない場合には、*please* との共起も容認される。
- 主語が *you* ではなく、3人称の名詞や代名詞であることもあるが、使用されている語が3人称というだけで、意味の本質は2人称である。よって、それは、意味の観点から言えば、呼びかけ語と同じである。

## 参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 東京：開拓社。
- Bolinger, D. (1977). *Meaning and Form*. London: Longman.
- Close, R. A. (1975) *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.
- Davies, E. (1986). *The English Imperative*. New Hampshire: Croom Helm Ltd.
- Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha, Tokyo.
- Huddleston, R. (1984) *Introduction to the Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, R. and G. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 久野暉、高見健一 (2013) 『謎解きの英文法 省略と倒置』 東京：

くろしお出版。

- Larsen-Freeman, D., and M. Celce-Murcia (2016) *The Grammar Book : Form, Meaning, and Use for English Language Teachers* 3<sup>rd</sup> ed. Boston : National Geographic Learning.
- Leech, G. and J. Svartvik (2002). *A Communicative Grammar of English* 3<sup>rd</sup> ed. Harlow: Pearson Education.
- 三ツ石直人 (2014) 「従属節内における *should* の研究」『東洋大学大学院紀要第 51 集』 東京： 東洋大学大学院 169-187。
- 村田勇三郎 (1984) 『講座・学校英文法の基礎 第七巻 文 (I)』 東京： 研究社。
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Swan, M. (2016) *Practical English Usage* 4<sup>th</sup> ed. London: Oxford University Press.

## Corpus

- BYU-BNC <<http://corpus.byu.edu/bnc/>> (BNC)
- Corpus of Contemporary American English  
<<http://corpus.byu.edu/coca/>> (COCA)
- Corpus of Historical American English  
<<http://corpus.byu.edu/coha/>> (COHA)

## 辞書類

- Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary* 8<sup>th</sup> ed. Glasgow: HaperCollins Publishers (2014). (COBUILD<sup>8</sup>)
- 『ジーニアス英和大辞典』 大修館書店 (2001)。 (ジーニアス)
- Longman Dictionary of Contemporary English* 4<sup>th</sup> ed. Harlow: Peason Education (2005). (LDOCE<sup>4</sup>)
- The Concise Oxford Dictionary of Current English* 6<sup>th</sup> ed., Oxford: Oxford University Press (1976). (COD<sup>6</sup>)